

空性（くうしよう）

永谷寺副住職 吉原 東玄
令和元年拾月式拾七日

天桂伝尊てんけいでんそん禪師（1648～1735）江戸時代初期～中期にかけて、主に大阪などで活動した禪僧。撰述の『供養参』と呼ばれる文献がある。当文献は、曹洞宗でも一部の方々には学ばれているようだが、臨済宗では広く学ぶと聞いている。

天桂禪師は、まず、我々自身の真実のありようを、輪廻・生死があるように見えるけれども、それらは全て、清浄本然の自心そのものであるという。この自心をもつて供養するからこそ、その施主が供養した際、既に亡くなっている人も、或いはこれから死ぬる人の本性（自性）も、同じく本然清浄なる空性に徹し、自由自在に供養することが出来るとされている。いわば、ここで天桂禪師が述べる「清浄本然の自心」とは三世十方に通じる仏陀の悟りの心そのものであるし、その実体性は無く、むしろ空そのものである。我々の供養の本質とは、「無遮」でなくてはならない。現在でも、施食会を無遮大会の延長線上に捉えることは可能だが、無遮の源泉は空であるが故にあらゆる事象に通じていく、色即是空・空即是色の回互宛転である。

だからこそ、時間・空間を超え、対象を限定せずに供養することが可能なのである。我々僧侶がそれを代行することにも、勿論妨げが無い。我々僧侶は無相福田の御袈裟を身に付けており、端的に「福田（ふくでん）」とも呼ばれる。福田とは、施主の供養が僅かでも、その善行を大きな功德にしてお返しする能力のことである。

さて、この空性なる自心のありようを突き詰めると、天桂禪師が指摘される「仏法中の事実」に至る。それは、仏法としては元から、死者も生者も区別する必要が無いということだ。生死を区別してしまうのは、分別的発想にとられる凡夫の見解なのである。然るに、施主がとにかく供養したいという至誠心をもって布施を行じたならば、それはたちどころに檀那波羅蜜となって、僅かな供養が十方の法界に通じ、死者の冥福を助け、その行き先である報地を綺麗にするという。そして、その功德は永遠の未来にも、尽きることがない。ここにも、福田が活かされている。

天桂禪師は、我々の供養の心と、その気持ちによって行われた場合の功德を、このように説いた。だからこそ、日に日に供養を行うことが出来る。

愛知学院大学准教授 菅原研州師『つらつら日暮らし』より